熊本YMCAの使命
熊本YMCAは、熊本バンドの精神をうけつぎ、イエス・キリストによって示された愛と奉仕のわざに励み、青少年の精神・知性・身体の調和のとれた全人的成長を願い、すべての人々がひとつとなるための働きを行います。
①共に生きる社会 ②地球環境の保全 ③生涯学習の推進 ④ウエルネス活動 ⑤ボランティア活動 ⑥平和な世界

KUMAMOTO
YMCA NEWS 3
March 2009 vol.442
THE YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION

■ホームページ
www.kumamoto-ymca.or.jp
■ブログ
kumamoto-ymca.wablog.com
■メールマガジン登録
www.kumamoto-ymca.or.jp/cgi-bin/mail/mail.cgi

●発行所／(財)熊本YMCA／〒860-8739熊本市新町1-3-8 TEL096-353-6397㈹
●編集人／神保勝己　●発行人／堤　弘雄　2009年3月1日発行(毎月1日発行)
1984年8月15日第3種郵便物認可　定価60円(送料60円)

一歩 前に 進もう
～今、YMCA活動の過去と未来を考える～

東京YMCA名誉会員の坂口順治さんに、熊本バンドや国内外のYMCAのこれまでの活動を紹介しながら、今後の私たちの生き方を考えるヒントについてお話しいただきました。

先達から何を学び、継承してきたか

今年は社会にとっても、世界のYMCAにとっても大きく変換する年だと思います。アメリカでは今年、初めての黒人大統領が誕生しました。オバマ大統領の就任演説の中に、私が共感した3つのポイントがありました。第一は、第16代大統領リンカーンの言葉を引用し、建国の理念をもう一度見直す、原点に戻るということを強調したこと。第二に、社会を構成する多民族の一人ひとりが責任を持って国をつくること。第三は、国が生きていくことは旅をすることと同じだということです。私も人生を考える時、聖書の中に「旅の連続の中にある」という言葉が記されていることを思います。

では、私たちの先輩である熊本バンドの働きはどのようなものだったのでしょう。YMCAとも関わりが深い宮川経輝、小崎弘道、海老名弾正ら20歳前後の若者たちは、次の世代や日本を支えようと誓いを交わし、後に熊本バンドと呼ばれます。

同じように、札幌では内村鑑三や新渡戸稲造が、横浜では植村正久らが日本の明治初期の教育を大きく前進させていきました。彼らは小さな集団にもかかわらず歴史に残る大きな波及性を持っていました。

また、日本でハンセン病患者を救済するために生涯を捧げたリデル・ライト両女史の精神は、熊本で今も連綿と受け継がれています。2000年社会福祉法の改善に寄与されたのは、神奈川県立保健福祉大学名誉学長の阿部志郎さん、牧師で衆議院議員の土肥隆一さん、そして、私が学生時代に指導を受けた経済学者の隅谷三喜男さんです。3名ともYMCAと関わりが深く、脈々と受け継がれる熊本バンドの精神が、現代でも「地の塩」となっていることを表わしています。ほか、カウンセリングの創始者であるカール・ロジャースや日本のキリスト教教育に大きな影響を与えたジョン・R・モット、元日本YMCA同盟総主事の齋藤惣一など、世界のYMCA活動の歴史を見ても、数多くのエピソードが残されています。先人から受け継がれてきた精神に加え、私たちはこれから何をすべきでしょうか。

世界的にも、今は時代の潮目。金融・経済の信頼が失墜し、IT革命や労働力の商品化の時代が終焉。アメリカの単一グローバリズムから「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞの詩のように、共存的多元主義の社会になっていきます。情報と知恵がインターネットによって世界共通となる一方、人間関係は密接になると思います。しかし、少子化による小家族化、メールや携帯電話の普及などによって対面的コミュニケーションが不足しているのが現状です。人と人との直接対話が復活すると同時に、生命や人間関係の結びつき、協力、自然の畏敬を感じる五感が大切になる「環境力」が求められる時代になってくるでしょう。

今これから何をしていくべきか

私が提案したいのは「虫の眼・鳥の眼・ホットな心」を持つことです。虫の眼は、人と近接して直接コミュニケーションをとること。鳥の眼は、社会変化への先見性を持つこと。ホットな心とは、初心に返ること。産業革命時のイギリスで、青少年のためにYMCAを立ち上げた有志ボランティアの情熱を思い描いてください。虫、鳥の二つの視点を大切にし、それを支えるのがホットな心です。

さらに、3C＝コミットメント（献身、委ねる）、コミュニケーション（対話力）、クリエイティビティー（創造性）を磨くことが大切です。人と人とが出会い、つながることで響き合う力が生まれます。1＋1＋1＝3（和）に、3×3＝9（積）という形で新しい力が生まれます。先に紹介した先輩方も、共に響き合う力によって、偉業を成し遂げてきました。

私たちが一歩前に進む生活を送るためには、第一に、自分を見つめ、自分の長所・強みを見つけて、さらに伸ばすこと。第二に、一日一生の生き方をすること。内村鑑三は、朝に生活目標を掲げ、夜にはその評価をし、感謝をして一日を終えるという生活を送っていたそうです。そこで、3カ月先の達成目標を設定し、具体的なスケジュールやプランを立ててみてはどうでしょうか。最後に、職場でのコミュニケーションを円滑にするために「水道方式」をお薦めします。大きなダムから流れる水がいくつもの水道管に分配されて各家庭に届くように、人から人へ教えたり、教えられたりして新たなエネルギーになるのです。

一歩前に進むことは、人生においてどれほどの意味があるのか、人生がどれほど奥ゆかしいものになるのかということを味わいながら、今日を生きていただきたいですね。人との交流を通して生まれてくるものは、すぐには成果が出ないかもしれません。しかし、それが我々の生き甲斐だと思えば、素晴らしい人生になっていくだろうと思います。

坂口　順治さん
1932年生れ。中学時代に教会YMCA運動に参加し、学生YMCAで活動。関西学院大学大学院、ミシガン大学大学院修了。現在は日本社会事業大学専門職大学院講師、とげぬき生活館館長。2008年には東京YMCAの名誉会員に推挙された。

わたしと聖句

ヨハネによる福音書第5章7節～8節

病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

熊本ハーベストチャーチ
中村　陽志

あなたの人生の転機

過去の悪い人間関係や状況に縛られて生きている人もいれば、そのような中からでも、逆境を人生の肥やしに前向きに生きている人も大勢おられます。逆境の中、前向きに人生を送ることがどのようにすれば出来るのでしょうか。すばらしい出会いこそ人生の転機となるのです。

この箇所には38年間病気で苦しんでいた男性が出てきます。イエス様はこの彼に向かって「良くなりたいか？」と質問されました。彼のいたベトザタという池の周りはささやかな希望を頼りに多くの病という問題を抱えた人々が集まっていました。しかしその希望はほんの一握りの人のためのもので、他の多くの人々は失望と不安の中にいたのです。格差社会の負け組と勝ち組のようなものです。彼は負け組の理由として、友だちがいないという状況のせいにします。しかしイエス様はシンプルな力強いことばを投げかけられたのです。イエス様はあなたにも同じことばを語っておられます。過去の状況や今の悪い環境に目を向け悲観的になるのではなく、イエス様との出会いから来る力によって「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい！」と。この出会いこそがあなたの人生の転機となるのです。